

PHOTO ESSAY

東広島キャンパスの自然(植物)

-21-



文写真・関 太郎
(理学部附属宮島自然植物実験所)

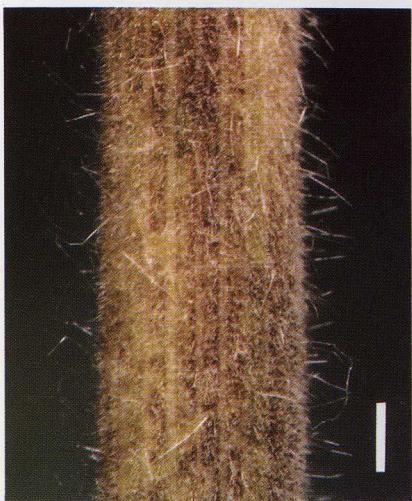


ウスバザサ

[*Sasa septentrionalis* Makino var. *membranacea* (Makino et Uchida) S.Suzuki]
山中池, 1996年4月15日撮影。

ササ属

Sasa



ピッチュウミヤコザサの稈鞘の毛
バーは1mmを示す 甲山町産

ウスバザサの稈鞘



ウスバザサの葉鞘



東広島キャンパスの中には、めずらしい笹が自生している。理学部方面から工学部方面へ渡る橋の上流にも下流にも、このめずらしい笹の群生が眺められ、冬季には葉の縁が白くなつて美しい。この笹はウスバザサで、東北地方に分布の中心があり、中国地方に隔離的に分布している。広島県内でも、庄原市から三良坂町にかけての北東部に散発的に知られ、西条盆地の产地は飛び離れている。たぶん、日本列島での本種の分布の南限にあたるであろう。

笹は竹とともにイネ科(タケ科とする説もある)に属する。竹と笹の違いは、大きさの差だけでは決められない場合がある。竹は成長するにつれて、竹の皮が早く脱落するのに対し、笹はいつまでも皮がついていることで区別できる。

笹は日本列島を中心に、一部、朝鮮半島や中国の四川・広東省にも分布し、とくに、日本の温帯林では多数の種に分化している。日本の笹は、狭義のササ属のほか近縁のスズザサ属、アズマザサ属、スズタケ属、ヤダケ属、メダケ属などからなり、ササ属と総称されている。

ササ類は花がめったに咲かないことや、葉の形態が環境によって著しく変異するためにその分類はきわめて困難である。日本のササ類の研究は、一八九〇年代から一九四〇年代にわたって、牧野富太郎・中井猛之進・小泉源一などによつて行われ、多くの新種が発表された。その結果、ササ属だけでも既知の種は四二〇種に達していた。

鈴木貞雄博士(広島文理大・植物学・昭和十一年卒)は、この困難なササ類の分類に取り組まれ、「日本タケ科植物総目録」(一九七八)の大著にまとめられた。四二〇種もあつたササ属は三十五種に整理され、各種に詳細な記載と図・写真・分布図が付されている。鈴木博士が分類の形質として重要視されたのは、稈鞘(かんしょう、いわゆる竹の皮にあたる)と葉鞘(葉の基部が稈を包んでいる部分)にある毛の状態である。これらの毛は環境による変異が小さく、安定した形質と見なされる。ウスバザサは、稈鞘に逆向きの微小さな毛と水平に広がる長い毛が混じっているのが特徴である。早春にはウスバザサの毛は脱落するので、別種の毛を写真で示しておくる。

昭和五十四年八月四日に、鈴木博士を新キャンパスの予定地にご案内した。私が山中池で採集したウスバザサの標本の同定をお願いしたところ、東北地方に分布するササが、西条盆地にあることに驚かれ、ぜひ、現地を見たいとのご希望であった。当時は細い峠道を歩いて山中池を越えた。その途中で、珍種ジヨウボウザサ(アズマザサ属で岡山県上房郡で最初に発見された)を見つけられ、二度びっくりされた。やがて、山中池でウスバザサの群生を確認されて、博士は感慨深げであった。いまでも、ウスバザサは山中池の岸辺で健在である。今後とも、大切にしたいキャンパスの植物である。